第3回シンポジウム 第2部 ディスカッション
（2020年3月11日(水) 15時～17時30分にオンラインで実施）

（柄本）
はい、松尾先生どうもありがとうございました。松尾先生の発表では国際調査におけるエージェンシーに関連するような要素をご紹介されたり、それから幼稚園、小学校からの取り組みであったり、国語、それから道徳での中学校での取り組みの紹介でも紹介していただきまして、最後は今後の検討点として発達の課題や評価に関することも挙げていただきました。
それでは、これからディスカッションに移りたいと思います。自由に進めていいかなと思いますが、鈴木さんいかがでしょうか。

（鈴木）
はい。皆さん、ありがとうございました。本当に素晴らしいご発表ばかりでした。松尾先生からPISAのお話をいただきましたので、PISAについてなのですが、日本の場合、どうしでも結果公表の時に、リーディングリテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの平均得点と国際的な順位ばかりが報道されてしまうのですけれども、むしろ質問紙のデータからみえてくるものが非常に大きいと思っています。
そのうえで、先ほど松尾先生のお話しでもありました生活満足度について、PISAの報告書でも、ラテンアメリカとか、東ヨーロッパの国々がポイントが高く、逆に東アジアの国々が低いことが明らかになっていて、その背景に文化の違いが影響している可能性が言及されています。日本人は控えめなので低くデータが出るのではないかという指摘もあるのですけれども、松尾先生に示していただいたように、2015年に6.8だったのですが、2018年に6.18ということで、0.62ポイントを落ちているという点は、課題でると考えています。ウェルビーイングに向かって人が生きていくということを前提にするとすれば、このポイントがこのままでいいのだろうかと考える必要があると思います。また、その背景に一体に何があるのかは、これから分析を深めていかなければならないのではないかと思っています。もしこの辺りについて、ほかの先生方から何かあれば、教えていただきたいと思います。

（柄本）
はい。どなたでも。それでは松尾先生お願いいたします。

（松尾）
はい。じゃ、ちょっと私から口火を切らせていただいて。そうですね、私はPISAの質問紙で色々と示されていることについて、もっと注目すべきだなと思っています。ちょっと調べたところ、韓国の生徒も生活満足度が低いのだけれども、2015年からは上昇したということが韓国では報道されていたりします。それから、2018年にかけて得点がすごく低下していたのが日本とイングランドだったと思いますけれども、イングランドのほうでは、生活満足度の得点がていかしていることについて着目している記事を見つけることができます。

日本は良くも悪くも、生活満足度などの質問紙調査の結果には着目していない印象がありますどうしてこのような結果になったのか、民族性というか、文化というか、やっぱり控えめであったりとかが回答に影響していると思いますが、やはりもうすこしエージェンシーに関する変数についても改善していく必要があるのかなと。それから鈴木さんの触れられた失敗への恐怖ですね、あそこもやはり非常に重要なところだったんですけども、これに関しては、竹内さんがすごくヒントをくれたと感じています。やはり明らかな正解があったりとか、唯一の正解があるものというものは、失敗がわかりやすくて、チャレンジがしにくいのかなと思うんですね。だから探究学習とか、竹内さんがおっしゃったポイントですと「問いと答えの間が長い」、すごい表現、すごくいい表現だと思いますが、ああいう学びの中で、失敗しても仮説を組み直したり、違うプランを作ったり、また修正していく、ああいう学びをしていくと、チャレンジをして、失敗を恐れすぎないという学びができているかなというふうに思うんですね。フィンランドとかエストニアとかはひょっとしたらそうなのかなと思います。

（柄本）
　はい、ありがとうございます。他にいかがですか。そうですね、元々教育は子どもや社会の幸福のためにということで、ウェルビーイングを目指しているはずなんですが、その一部であるであろう、満足度がちょっと低いということは確かに由々しき問題でして、もしかしたらそこに日本の教育の一つの特徴があるのかもしれないと解釈しています。木村先生はいかがですか。

（木村）
　そうですね。とてもビックイシューなので、これが要因というのはもちろん言いにくいところなのですけど、やはり社会経済的な格差はおそらく影響していそうだと思いますね。やっぱり日本もアメリカみたいにだんだん超金持ちとそうでないところの格差が広がってきている中で、じわじわ生活に困窮している家庭は増えてきているのが、そこで、子どもたちのウェルビーイングに関わるポイントの低下とつながっているのが一因としてあると思います。その社会経済的な背景を分けて考える必要があるかなと思いますね。ただ、竹内さんが、若狭高校さんが示しているように、生徒たちが本当に学校の授業に満足感、ポジティブな評価をしているところが増えてきているかなという印象はあって、そこをより広げていくことで、生徒たちの学校満足感の中身は変わっていくかなという期待をもっているところではあります。それが生活満足度につながるかどうかはまたちょっと別の話かなと思います。やはり、OECD さんも見せているように、教育への公的財政支出が非常に日本は少ない、どこの国と比較しても。日本は低コストでハイリターンを目指している国の一つでもあるので、その辺りで、先のフィンランド、エストニアと比べると生徒たちをすごい、追いつめてしまう面もある可能性はデータを見たときの感想としてはあります。

（柄本）
はい、ありがとうございます。様々な要因があるので、そんなにズバッとはなかなか言うべきではないかもしれないのですが。そうですね。竹内さんはいかがですか。生活満足度とか、学校の中での満足度とか、いろいろあると思いますが、実感として、こういう時にすごく満足を感じるとか、楽しいとかいうのでもいいですけれども。

（竹内）
そうですね。さきほど、木村先生や松尾先生からお話しいただいたのですが、やっぱり探究学習は自分が見つけた課題を自分なりに解決していくということが大きく、実際辛いことも結構多いです。私のクラスの中で見ていても、市役所に話を聞きに行ったら、学生の考えでしょう、というふうに甘く見られてしまったなどという現実問題が実際にあるんですけど、その中で、生徒がやっていることに、すごく興味を持ったという意見をもらったり、プロジェクト計画が一歩進んだりしたときは、やはり満足というか、達成感を一番感じているなと思います。それが一番大きい理由もやはり自分が見つけたことを自分でやっているから、すべて自分でできたという喜びも、満足度、満足という部分では含まれてくるんでないかなというふうには思います。主体的にやるというのが満足度にどうダイレクトにつながっているか部分まではわからないですけれども、少なくとも関わりはあるじゃないかなと思います。

（柄本）
ありがとうございます。はい。教育の中での取り組みをお話しいただきました。教育学の研究者の中では、教育にすべての責任を負わせないほうがいいということもよく言われまして、それこそ木村先生のおっしゃるように、社会経済的な面も含めて、それから法制度であったり、いろんな面で考えた方がいいだろう。つまり、学校だけに責任を負わせて全部解決させるべきではないという視点があるようです。
続けても構いませんし、違うトピックでもよろしいですけれども、いかがでしょうか。会場に来ているはずだった学校の現場の先生方のご意見をすこし予想しますと、日本のカリキュラムにエージェンシーが関連しているだろうというのはわかるし、大事そうというのもわかるんだけども、自分一人じゃなかなかちょっと難しいなという声もあると思うんですけれども。例えば、先生として、学校として、どう取りくんでいったらいいだろうというのは、何かありますか。松尾先生。

（松尾）
そうですね、さっき竹内さんが教科についておっしゃっていたし、私は韓国の IWG に参加させていただいたときに、グループのディスカッションであったんですが、「コンピテン

シーとかエージェンシーを育てるのに、伝統的な教科（フォーマルな教科）の中で育てられる例はないか」ということをファシリテーターがメンバーに質問したりとかがありました。さきほどの中学校の２年生の国語の取り組みを挙げさせてもらったんですけれども、竹内さんがおっしゃったように、探究とか、ああいうプロジェクト型の学習の中で、エージェンシー、コンピテンシーを育まれるときがあるんですけれども、それとは別に伝統的な教科の中でどうやって育むようにいくかという一つのポイントになるのかなと思います。プロジェクト方の学習で育つのはわかったが、じゃあ教科の中で育むのはどうしたらいいのか。これは一つのポイントになるかなと思います。毎回の授業でいつも、エージェンシーの育成について焦点を当てられないかもしれないのですが、教科の中で育んでいくということが大事になってくるし、それは先生方の知りたいところなのかなと思います。

（柄本）
　はい、ありがとうございます。竹内さんが問いと答えの間が長い課題ということを出されていまして、教科の中においても、そのような問いと答えの間の長い課題が入ることがやはり大事なんでしょうか。

（竹内）
そうですね。答えにたどり着くまでに考える作業が少ないと思うんですよ。問いと答えの間が長いっていうのもそうなんですけれど、提供された問いについて、問いと答えの長い課題では、問いを理解するのにも時間がかかったりする場合があって、そのためにも、自分が持っている意見とその問いとかが合致するポイントを探したり、問い自体について詳しく読みといたりすることが大事になってくると思うので、問いと答えの間に距離があればあるほど、生徒が自分の考えることを繰り返す時間が増えるので、それが私の中では生徒を育てていく、教育につながるんじゃないかなと思いました。

（柄本）
　ありがとうございます。

（松尾）
　はい、いいですか。やっぱり、いま、竹内さんがおっしゃったことは、鈴木さんが紹介してくださった山中先生のコメントに近いものがあるかなと思いましたね。科学者が研究していくことは試行錯誤の連続だろうし、「問いと答えの間の長い」という、そういう学びが一つのポイントになっていくかなと感じました。山中先生の言葉や竹内さんの考えが、これらかの教員養成とか、教員研修につながっていければよいと思います。ありがとうございます。

（鈴木）
　ありがとうございます。竹内さんにちょっと聞きたいのですけど、本当に素晴らしい発表でした。

（竹内さん）
ありがとうございます。

（鈴木）
　竹内さんが自分の言葉で語ってくれたのがすごいと思います。内容も素晴らしかったです。ありがとうございます。松尾先生の話でも出ていたのですが、竹内さんがプレゼントの中で、問いと答えの距離が長い課題というのが、私の中で印象的でした。問いも自分で主体的に立てることが大事で、その中で長い距離を走り続ける目的意識を持っていたり、失敗もその過程の中ではあると思うのですが、自分事として答えに向かっていく姿勢というのは、まさにエージェンシーだなと思いました。この問いと答えの距離が長い課題というのは自分で考え出したフレーズなんですか。どこかにヒントみたいなものがあったのでしょうか。どのような過程で生まれたのかを教えてください。

（竹内）
　渡邉先生と何回かやり取りさせて頂いて、このプレゼン資料を作ったんですけど。私が最初に書いていたセリフを文字化したときに何が一番当てはまるかなという話を渡辺先生とさせてもらって、考えた末出してきたのが、この問いと答えの間が長い、考える時間が大切だいう形に至りました。

（鈴木）
　なるほど。ありがとうございました。渡邉先生の御指導の賜物なんですね。

（竹内）
　そうです。

（鈴木）
　最初はどんなフレーズだったのでしょうか。

（竹内）
　フレーズというよりも、私が最初に言っていたのは、課題について何度も何度も自問自答を繰り返すことで答えが得られるという考え方を大切にしたいということです。まさに自問自答という言葉を図的に表したらどんなふうになるのかという流れになった際に、問い

と答えの間が長いというのが、考えている時間を距離に例えて表現できるんじゃないかという話になり結果このような表現になりました。

（鈴木）
なるほど。ありがとうございます。すごい分かりやすいですね。

（木村）
同じようなことを若狭高校でもそうですし、福井大学教育学部附属義務教育学校でも考えているんですけど、やっぱり問いから答えへの長さ、このプロセスは探究なのですよね。そこに探究活動の中に色々な力の芽生えとか、育ちがあると思っていて、先ほどのトピックで出た、教科というところを見たときに、それこそ若狭高校の渡邉先生とも同意しているところなんですけど、やっぱり少なくとも教科で見ると単元レベル、単元という時間の長さで生徒たちの学びと育ちを考えていく必要があるところは若狭高校でも附属でも同意しているところです。そう考えたときに、教科の授業も単元に入ったときに大きな問いがあって、一つの単元が終わるところに答えが出てくるんですけれども、その歩みを一時間ごとにぶつ切りするのではなくて、それぞれの歩みの中で探究していと、力の芽生えが見えやすくなるということが見えてきてるところです。そういう意味で、カリキュラムをどうデザインするか、インプリ（カリキュラムの実行）のところを考えたときに、少なくとも時間という感覚、感性を持ってカリキュラム・デザインしないと、どうしてもやはりこの授業でこの力が見えたっていう議論に収斂しちゃうのでキツくなるんですよね。たぶんその、一瞬を切り取ると、エージェンシーのコンポーネント（構成要素）のこれだというのは見えたりもするのですが、それがどう発達していくかの育ちのプロセスが見えないので、そこをどれだけ切り取りの発想から時間を延ばす発想にできるか、というのがこれからの鍵かなと思います。今のは教科の話で、課題探究の話だともっと長い時間のスパンがあるので、竹内さんに関して言うと本当に今２年生が終わるところで、１年目の夏ぐらいからですかね、課題を探し始めて水仙に辿り着いて、そこから個人で探究して、また今度は水仙の球根を探す旅が始まって、それが実は身近に、おおい町にもあったりしてみたいな。もうちょっと長い課題探究、総合的な学習や探究の時間でみえてくるものも、また違うというのが印象としてあります。私なんかはありがたいことに若狭高校さんにチョコチョコ行かせてもらったり、竹内さんとチョコチョコ会わせてもらうと、会うたびに成長している、伸びてるっていう感じが感覚としてあって、それをもうちょっと私たちも言葉で表現しなきゃいけないんですけども、そういった評価っていう意味での、これは若狭高校さんでやっていますけれど、他者ですよね、外部の人と生徒さんと出会う機会をいっぱい作って評価を生徒たちに返していくという取り組みがまた新しい評価の在り方、エージェンシーを見取る在り方につながるかなと思いました。
私はここでもう一つ時間があったら聞きたいんですけど、竹内さんに。さっきのお話にあ

った自分がやるとか、自分事に置き換えて考える力を語ってくれたところで、そこがじゃあ、「自分たちごと」、「私ごと」ではなくて「私たちごと」になるところもあるんだろうなと思って。そういったところが、これからなのかもしれないんですけれど、見えてきてるのかどうか。今「自分はこうしたい」という言葉が多かったんですけど、「私たちは」「自分たちは」みたいな、そういう経験はあるのかなっていうのが教えていただけたらありがたいと思いました。

（竹内）
　そうですね。実際いま私が探究学習を一人でやるのが、結構私が先程から「私自身」とか「私ごと」と言っている部分につながっているんですけど、若狭高校では、校内で SSH の研究発表会を行っていて、そこで私の場合だと自分一人でずっとやっていたことを、校内の生徒さんたち、生徒のみんなと共有できる機会があって、実際それに出たときに、自分と同じ中学校からきている後輩達が話しかけてくれて、その子たちもおおい町に住んでるんで、水仙どこにあるか一緒に見に行きたいです！みたいな前向きな話を聞くことが出来ました。この時に自分事が自分事だけではなくなったという実感があって、私自身いろんな人の発表を聞くと、自分が知らなかった観点で自分と同い年の、近い年齢の人たちが研究して、自分と同じ学校内で研究しているときうというのも新鮮なので、そういう共有する場があればあるほど、もっと自分たちごとに、学校っていう小さな中だけど、広げていくことはできるんじゃないかと思います。それがその先にどう出ていくか。更に自分の住んでる町にどう広げていくのかなどという広がりを持っていくにはどうしたらいいのかというところまではまだわからない部分は実際にあります。学校内だけだと発表する場で実際に自分たちと同じ年代の人たちに共有することで、「自分ごと」が「自分たちごと」のようになっていると感じます。

（木村）
　ありがとうございます。

（竹内）
　ありがとうございます。

（柄本）
　ありがとうございます。「自分たちごと」というのは、共同エージェンシーという考えにもすごく近いと思うんですが、個人的に気になるのは、生徒同士で巻き込み合うっていうのもあれば、良い意味で先生が巻き込まれるというのもあると思っています。そのときに、あまり巻き込まれたくない先生、これは抵抗感の話をしていますけれども、自分があんまり変わりたくないっていうんですかね、ちょっと抵抗感みたいなのもあるかもしれないなと。こ

れは東京学芸大学の方で抵抗感に関して調査をやっていまして、今年中には報告が出ると思うんですけど、先生もおそらく一枚岩ではなくて、生徒も一枚岩ではないと思うんですが、なんていうんですかね、生徒とともに歩むのがあまり好きじゃない人、あまり一緒に歩みたくないと思う人もいるかもしれないということがあります。で、おそらくそれは高校とか大学の教員養成でどういう体験をしてきたかっていうのがかなり影響してきていると思っています。自分が受けてきた経験だったり、受けてきた教育の影響をかなり受けていると思いますので、今後の Education2030 のフェーズ２を考えると、いかに「巻き込まれて良かった」、「生徒と活動して良かった」っていう体験を高校とか、大学の教員養成の段階で提供できるのがすごく大事なんじゃないかなってすごく思っています。

ごめんなさい、私からも質問したいんですが、竹内さんにまた聞いてもいいですか？

（竹内）

はい、大丈夫です。

（柄本）

先生の関係性っていうのが、かなり難しいところだと思うんですね、探究学習であったり、それから共同エージェンシーっていう点でもそうだと思うんですけど。先生の関わり方について、なかなか他の学校と比較するのは難しいと思うんですが、何か特徴に思うところはありますか？

（竹内）

探究の時間の先生は、教師っていうよりもアドバイザーのような感じが強く、教室内にずっといて先生から定期的に話しかけてくるというよりかは、随時生徒が自分たちが今思っていることを先生に伝えに行くことが多いです。生徒は、目的が大きかったりするとやはり脱線してしまい、もともとの目的からズレてしまった方向に進んでしまうことがあります。高校生だということもあるのですが、このような時に間違った方向に進んでいる私たちをちょっと待ってと止めてくれるのが、やはり先生方で、その言葉があるからより自分の研究にまっすぐに向かえています。それが若狭高校の特徴なのかと言われるとちょっとよくわからない部分もあるんですけれども、若狭高校の先生は探究以外の時でも、生徒から出てきた疑問に対して教師が真剣に向き合ってくれるというのを感じています。

（柄本）

日常といいますか、学校を離れたところで何か影響を感じますか？そのようなかかわり方を受けたり、学校での取り組みから。無理に新型コロナウイルスに関連付けてほしいわけではないんですけれど、今まさに自分で何をしなきゃいけないかを考えなきゃいけない状態かもしれないって思いまして。何か影響は感じますか？

（竹内）
探究学習を進めていると、計画的に進めるということにすごく意識を持っていくことが多く、先生方から実際に探究学習だけではなく普通の教科学習のときにも言われるんですけど、見通しを立てて、計画を立てて、学習を進めることが大事だと言う話をよく聞きます。今回コロナウイルスで学校も休みになって、自分も一人で、家にいることが長い中で、自分の学習面においても生活リズムにおいても自分で先を見通して生活するっていう部分では、実際できている部分は大きいかなというのは感じています。

（柄本）
ありがとうございます。
それでは他の先生方に質問させて頂きます。松尾先生、何かありますか。大雑把な感じでうかがってしまってすみません。

（松尾）
そうですね。質問というか、あの、感想にも近いんですけど、今日やってみてスッキリしたところがいっぱいあって、それぞれのプレゼンテーションがすごく噛み合っていたなと思います。竹内さんのプレゼンが衝撃的というか感動的だったんですが、竹内さんのプレゼンを中心に、そこに向かって我々のプレゼンが、かなり結ばれてきているところがあるのかなと思います。私から出した PISA の結果によるエージェンシーの、日本の生徒の心配なことに関してもそうですね。主体的に学ぶことで満足感が上がるっていうのは海外の研究、西洋圏の研究はあるのですが、竹内さんからもそういう話がありました。それから粘り強さに関しても、キーワードとなる「問いと答えの間が長い」学習の場合は、そのプロセスでくじけそうなこともあるだろうし、思わぬ困難もあるんだろうけれども、それを乗り越えて、粘り強さは培われるだろうし。それから、竹内さんの成果が出たときに自分の手柄だって思えるっていうようなニュアンスの話も、そうした経験が自信につながるんだろうなって思います。あとはそういう調査研究や事例から得られた知見を、我々、私とか木村先生の役割としては教員養成、教員研修にそれをどう活かしていくかっていうことが重要になってくると思います。寄り添う教員のスタイルというか、口の出し方、出さないところっていうのは、すごく重要になってくるだろうなっていうのがあって、若狭の先生方がやられているようなことも参考に、どういう教員を育てていくかっていうのに還元できたらいいかなっていうふうに思いました。感想ですけれどもね。

（柄本）
はい。ありがとうございます。松尾先生の感じられ方、感想を今お話いただきましたが、他の方も今日ご参加されてどう感じられたかを少しお話いただいて今日は終わりにしたい

かなと思います。順番は、どうしましょうか。どなたでも大丈夫ですけれど。じゃあ、私が話しますのでその間に皆さん考えていただけますか。

私の感想で言いますと、私は教員養成に関わっていますので、いかに教員養成として教育をサポートしていくかっていうことを考えています。今回のご発表をお聞きして、自分から動いていく主体性、責任感っていう意味でのエージェンシーと、それを支える側のエージェンシーっていう２種類のエージェンシーを先生は持たないといけないのかなっていうことで、その２種類についてどうしようかなということを今回非常に課題として受け止めました。

（鈴木）

ありがとうございます。今日は、本当に素晴らしいご発表を３人の方々から聞かせて頂いて、ありがとうございました。我々OECD としましては、今日やはり、中心テーマになっていたエージェンシーという考え方というのをもっともっと多くの人たちに知っていただきたいと思いますし、特に学校で、このエージェンシーというのを育んでいただけるようなそういった授業、今日の竹内さんのご発表で言えば探究学習、その問いと答えの長い課題、あるいは木村先生からもありましたように、教科の中であれば単元を通して子どもたちの学びを構築していくような授業づくり、そういったものが広がっていくとありがたいなと思っていますし、あるいは我々よくクロスカリキュラムと言っていますけど、教科横断でそういった力を育んでいくっていうのはひとつ重要な考え方だと思っておりますので、是非、それは一つの何か型があるというわけではないというふうに思っていますが、いろんな学校でいろんな先生方が、それこそ先生方のエージェンシーを発揮して授業改善、授業づくりに取り組んでいっていただけるとありがたいなと思いました。以上です。今日はありがとうございました。

（竹内）

今回そのコロナウイルスの影響もあって、実際東京で、話すことができなくてすごく残念な部分も大きいんですけど、オンラインミーティングに関しては経験がほとんどなく、結構不安もあったんですけど、実際にいろんな方のプレゼンテーションとかディスカッションの内容も聞いてみて、自分の学校でやっていることが、またそれによる影響がどの程度あるのかというのを、生徒自身わかっていない部分が結構多いと思うので、まずは校内の生徒にもエージェンシーという枠組み、難しい枠組みなんですけど、エージェンシーについて考えるような機会があればいいなというふうにさらに強く思いました。まと、生徒だけではできない部分が多いので、教師の方々の支えがあって今私自身探究活動も進められていますし、こういういろんな教育の場で生徒と教師が一緒にやっていくことが大事だということを改めて感じられました。ありがとうございました。

（木村）

今日のコンパスとエージェンシーの話も聞かせて頂いて、今 ISN でも生徒のエージェンシーがどう育まれていくかを実際に竹内さんと同じ高校生や中学生の声も聞きながら、今、アンケートでの数量的な研究と、あと実際に生の声を聞く質的な研究の両方を急ピッチでやっているところでもあるので、見えてきてるものがあるんですが、やはりエージェンシーという言葉の良さは、ウェルビーイングとセットになっているってとこだと思っていて、それこそ学校の教育目標にはエージェンシーと同じような目標群があって、それにもとづいて子どもたちを日本の学校は育てているんですけれど、エージェンシーって言ってくれることで、社会や世界、あるいはプラネット（地球）のウェルビーイングを考えようというベクトルが生まれるのだと思うんですね。それは学校の教育目標だけを見ているとなかなか見えにくいところでもあるので、そういう意味で、エージェンシーという英語、カタカナの言葉が、より開いてくれる大きな意味も日本的な意味であるかなって思って、それは先生にも生徒にも、あるいは保護者にもある気がします。そういった、言ってみればそう（当たり前）なのだけど、言ってみないと見えないものでもあるので、大事なことは声に出して明言していくことが大事だなと改めて今日、お三方の話と、柄本先生の話も聞いて思ったところです。ありがとうございました。

（柄本）

ありがとうございました。松尾先生も追加されますか？大丈夫ですか？はい。わかりました。本日はどうも皆さん長時間にわたりありがとうございました。

それでは、第二部の「これからの時代に求められる教育 OECD Education 2030 プロジェクト」についてはこちらで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。